沙羅の樹文庫だより

No. 154　2019年5月号

己が影 掬ひ上げつつ 畦を塗る

（東かがわ市・桑島正樹さん）

富士山の農鳥（のうとり）

（矢印の先の白い鳥の形わかりますか）

農鳥：春、鳥の形に見える、山肌の残雪、富士山や南アルプスの農鳥岳などに現れ、農作業開始のしるしとされる。孫が河口湖に合宿していて４月下旬撮影。

初音してしばらく風の音ばかり

（富津市・三枝かずをさん）

※今はすっかり上手に鳴きますね!

八十を超えて苗木を選びけり

（福岡県鞍手町・松野賢珠さん）

※いくつになっても変わらぬ日々をすごす元気さ、凛々しさ

名を呼べば声のやわらぐ春の草

すずめのかたびら　からすのえんどう

（奈良市・山添聖子さん）

★以上４作、１９．５．１２朝日俳壇・歌壇から

2019・今後の開館スケジュール

◆6 月は通常 15 日（土）と 16 日（日）
◆7 月は変則２週目 13 日（土）と 14 日（日）
★第１９回海の日のおはなし会★
14 日夕・於：伊豆高原駅クスの木の下
★開館記念子どものためのおはなし会★
15 日（祝）10:30～12:00 於：沙羅の樹文庫

◆8 月は 17 日（土）～延長 20 日（火）
◆9 月は通常 15 日（土）と 16 日（日）
◆10 月は通常 19 日（土）と 20 日（日）
◆11 月は通常 16 日（土）と 17 日（日）
◆12 月は変則 21 日（土）と 22 日（日）
★★★クリスマスお楽しみ会おはなし会★★★
２２日１０：３０～１２：００

毎月開館日の日曜には、
「子どものための小さなおはなし会」
❤午前１０：３０～１１：００❤
《楽しんで読み聞かせ・頑張っておはなし》
みんなで勉強会（おはなし・沙羅）は、
毎月開館日の土曜１１：００～１３：００
※文庫は原則第３週の日曜日とその前日の土曜日

沙羅の樹文庫
〒413-0235 伊東市大室高原 7-122
HP：saranokibunko.com

↑スズメノカタビラ

カラスノエンドウ→

ム寺院に行ったのは、リラの花咲くころだったなあ。◆北方領土返還は戦争やって勝つしかない?でも、彼のように思っている政治家はほかにもたくさんいるのでは?!◆保育園児が又もや年寄運転で犠牲に!　辛いニュースが続きます◆週末、お天気になあれ!!(西村)

文庫あれこれ◆クリムト展(東京美術館 7.10 までと豊田市美術館 7.23～)が開催中です。かつて、本の仲間とウィーンに行き、人物画に圧倒されました。でも、花や木のある風景もたくさん描いていて、それが、『長田弘 詩ふたつ』ID7662 を彩っています。「詩」のコーナーに。長田の世界とクリムトの世界の融合をぜひ味わってください。◆新元号「令和」の名付け親?で、その名を知った中西進著『日本人の愛したことば』ID9013 もなかなか読み深いです。◆この年になると、愛だの恋だの煩わしいと感じるのは、相手がまだ存命だからでしょうか。50 代の再会した男女の<懸命に寄り添おうとする>愛を描いた『平場の月』(山本周五郎賞)で、著者朝倉かすみさん、「大人の『世界の中心で、愛を叫ぶ』、『君の膵臓をたべたい』を書いてみたかった」と。そして、「社会的に弱い人、味方の少ない人を否定も肯定もせず書いていきたい」とも。未読。今月入庫。期待したい。◆京マチ子を知っている世代も少なくなったと思います。私は気が多いので、好きな女優(年上の)は何人もいるのですが、この人も特別でした。亡くなったニュースで、地の彼女を見聞きして、映画の中の京マチ子と何と違うことかと思いました。「羅生門」も「雨月物語」も封切時に映画館で観たわけではありませんが、後年、テレビで観たのが初めてではない気もするのです。とにかく、怖くて怖くて。でも不思議な忘れられない美しいオーラを放っていました。◆埼玉県飯能市に出来たムーミンバレーパークの 10 連休の大混雑をニュースで見ました。受け入れ側ももう少し配慮要ですね。◆3.11 の前年、手紙だけで知り合った郡山の子どもの本の仲間と北欧に行き、ヘルシンキでは「ムーミン展」を、スウェーデン(ビンメルディ)では「アストリッド・リンドグレーン・ワールド」を子どもに帰って心の底から楽しみました。もう少し、時間がたったら孫連れて飯能にも行ってみようかしら?◆朝日１５日夕刊 <「流刑の「おたあ」神津島で続く祈り>を見て思い出した本が『ひかり舞う』(なかがわなをみ作)ID12621。主人公平史郎が小西行長から頼まれて擁護する娘として登場。歴史物語外伝として大人もどうぞ!◆パリ・ノートルダム寺院の火災で思い出したのは、絵本『綱渡りの男』ID3101。故郷ノートルダム寺院の２つの塔の間を綱で渡った男、ニューヨークのWTCの２つの棟の間に綱をかけて渡り切った!!今はその棟(9.11 で崩壊)もありません。◆ノートルダ

伊・豆・高・原・便り

本　と　私

Yukiko. M

私と本との出会いは、まだ字の読めない４，５歳の頃だったと思います。父が病死して、母は、私たち３人姉妹をつれて鵠沼の実家に移り働きだしました。ころがり込んだ実家に前から住んでいた従妹の家には絵本や児童文学全集などがあり、私は絵本をかりては姉たちにせがんで読んでもらっていました。しかし、周りにいたおとなたちはもちろん、すでに学校に行っていた姉たちも忙しく、私は一人で絵だけを眺めていたのを思い出します。

小学校へ通いだしていちばん嬉しかったのは自分で本が読めるようになったことです。その頃から本が大好きでしたが、それが高じて授業中机の下で本を読んでいたのを先生に見つかり取り上げられてしまったことがありました。まだ１年生か２年生の頃だったと思います。その時は先生に叱られたことより、友達に借りた本を返してもらえるのかが心配でたまりませんでした。（もちろん後で職員室に呼ばれ無事に返してもらいました。授業中に決して読まないこと、という注意と共に）。

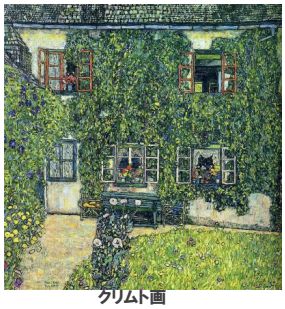
母の仕事の都合で大船に越した３年生の頃から、わたしは学校の図書室にいりびたり、週末には貸し出しがあるのが楽しみで、必ず借りるようにしていました。その頃に読んだのは『赤毛のアン』『若草物語』『小公女』『アルプスの少女ハイジ』などとともに探偵小説なるものにも目覚めシャーロックホームズのシリーズに夢中になりそれは現在のミステリー好きにつづいています。

考えてみると、読む本は外国のものばかり、聞く音楽もクラシックか外国のポップスやジャズ、映画もアメリカやヨーロッパのものとかたよっていました。これには、戦後間もないこの時代の風潮だけでなく、母の影響もあったと思います。母はクリスチャンだったのでわたしたちも小さい頃から教会通いをさせられました。中学生ごろから反抗期もあいまって教会離れをしてしまいましたが、現在１０２歳になる母はつい最近まで教会に通っていました。（スゴイ！）

皮肉なことに私が日本の小説を読むようになったのは結婚して夫と海外生活をするようになってからでした。日本語の本が自由に手に入らず、たまたま夏目漱石の『心』を読む機会がありそこから彼のほかの作品、森鴎外の小説など手に入る日本語の本はなんでも読みました。映画も黒澤明の作品をはじめて見たのは、フィンランドはヘルシンキの映画館だったのです。海外での５年間は自分の国の良さも遅れているところも客観的に見られるよい機会だったと思います。今は読む本の７０％は日本の小説となりました。

最近やっと友達から借りて『源氏物語』(瀬戸内寂聴）10 巻、宮本輝の『流転の海』全巻を読んだのですが、むかしだったら絶対手に取ろうとは思わなかったでしょう。年とともにちょっと間口が広くなったかなと思います。日本の若い作家たちにも興味があります。まったくついていけないと思うこともあるけれど、年の差を超えて共感できることも多いのがうれしい。眼も悪くなり集中力もつづかず忘れっぽくはなりましたがマイペースで読んでいこうと思っています。

★M さんは、日曜の午前に来て、ゆっくり棚を探して本を借りて行きます。読まれるジャンルは多岐にわたっているようで、スタッフの N&M さんも知らない本を教えてもらっているようです。
何年か前のある日、突然大学時代の友人ご夫婦が訪ねてこられました。話を聞くと、ご主人と M さんの ご主人が大学時代の友人で、そのお仲間が伊豆高原に集まったということでした。さらに、私の友人のご主人の元上司は私を可愛がってくれた人。ご主人の弟さんは私の小学校の同級生! おまけに私の主人と中・高同じ学校。人はどこかで繋がっているのだなあと、縁の不思議を思い、嬉しくなったものでした。（さら）



クリムト画

・・・・・・・・・・・・★・・・・・・・・

文庫だよりを読んだ友人から

稲垣えみ子さんの本について書かれていました。
（沙羅の樹文庫だより１５１号　「亜子」さん書評）
私は朝日新聞に編集委員のころに彼女が書いた文章を、ずいぶん書き留めたものです。
自分の周りにあるものから政治や社会の仕組みをとらえていました。

「情熱大陸」という番組で、彼女がインドの療養施設に滞在した際。医師に自分の不調を延々と訴える自分に医師が言ったのは「それで、あなたは幸せなのか」
何かを手に入れて幸せになろうとしている。お金、健康。それが手に入らなければ不幸なのか。病人は不幸なのか。
だとすれば、私たちはみな不幸にまみれて一生を終わるのだ。病と死からは誰も逃れられないもの。肝心なのは何かを手に入れることじゃない。ハッピーになること。
「ある」幸せがあるなら「ない」幸せがあったっていいじゃない。――　というようなことを言っていました。彼女の言葉がすとんと心に落ちました。

篠崎ミツ子

★文庫には、稲垣さんの本はほかに、「魂の退社」16823 があります。

２０１９年５月に入った子どもの本

絵　本

『お？ かお!』（ひらぎみつえ作　ほるぷ出版 2017）ID13010
『かんけり』（石川えりこ作　アリス館 2018）ID13029
『ルラルさんのだいくしごと』（いとうひろし作　ポプラ社 2017） ID13030
『わたしはあかねこ』（サトシン作　西村敏雄絵　文溪堂） ID13031
『みえるとかみえないとか』（ヨシタケシンスケさく　伊藤亜紗） ID13022
『ぺんぎんのぴむとぽむ』（ディック・ブルーナぶん/え　まつおかきょうこやく　福音館書店 2019） ID13020
『はりねずみのぽうけん』（ディック・ブルーナぶん/え　まつおかきょうこやく　福音館書店 2019） ID13021
『ソフィー、がっこうへいく』（パット・ジトロー・ミラー文　アン・ウィルスドルフ絵　二宮由紀子訳　光村教育図書 2019） ID13032
『王さまのよごれた足』（サリー・ポム・クレイトン文　ライアノン・サンダーソン絵　青山南訳　光村教育図書 2018） ID13033

読み物

『キャプテンマークと銭湯に』（佐藤いつ子作　佐藤真紀子絵　角川書店 2019） ID13034
『さよ 十二歳の刺客』（森川成美作　槇えびし画　くもん出版 2018） ID13035
『呉書三玉志』（斎藤洋作　講談社 2019） ID13023
『どこまでも亀』（ジョン・グリーン作　金原瑞人訳　岩波書店 2019） ID13024
『夢見る人』（パム・ムニョス・ライアン作　ピーター・シス絵　原田勝訳　岩波書店 2019） ID13036
『ハイ・フォースの地主屋敷』（フィリップ・ターナー作　神宮輝夫訳　岩波書店）ID13026
『シー・ペリル号の冒険』（フィリップ・ターナー作　神宮輝夫訳　岩波書店）ID13027
※上記 2 冊は同じ岩波書店から出ている「シェパートン大佐の時計」の続巻で、3 人の少年が成長していく姿がとても愉快なシリーズです。男の子、読んでみてください。

参考文献

『クマのプーさん原作と原画の世界 A.A.ミルンのお話と E.H.シェパードの絵』（アンマリー・ビルクロウ/エマ・ロウズ著　冨原まさ江訳　玄光社 2019）ID13028**※～6.30 まで「プーさん展」**
『子どもと本をむすぶ―児童図書館の歩み』（『子どもと本をむすぶ』編集会　児童図書館研究会 2019） ID13025

２０１９年５月に入ったおとなの本

フィクション

『父と私の桜尾通り商店街』（今村夏子著　角川書店 2019）ID17881※request
『マジカルグランマ』（柚木麻子著　朝日新聞出版 2019） ID17859
『とめどなく囁く』（桐野夏生著　幻冬舎 2019）ID17860
『平場の月』（朝倉かすみ著　光文社 2018)ID17884※山本周五郎賞受賞
『さようなら、ビタミン』（レイチェル・コン著　金子ゆき子訳　集英社 2019） ID17861

エッセイほか

『思わず考えちゃう』（ヨシタケシンスケ著　新潮社）ID17883
『望郷と海』（石原吉郎著 みすず書房 2012）ID17862
『森瑤子の帽子』（島﨑今日子著　幻冬舎 2019）ID17882　**※森瑤子は伊東出身**

『ルポ私たちが生きた平成―人と社会はどう変わったか』（共同通信社編 岩波書店 2019）17864
『いま、〈平和〉を本気で語るには―命・自由・歴史』（ノーマ・フィールド著　岩波ブックレット 2018）ID17865
『父が娘に語る美しく、深く、壮大なくわかりやすい経済の話。』（ヤニス・バルファキス著　ダイヤモンド社 2019） ID17863

新　書

『平成の通信簿 106 のデータでみる 30 年』（吉野太喜著　文春新書 2019）ID17866
『昭和天皇最後の侍従日記』（小林忍 +共同通信取材班著　文春新書 2019） ID17867
『二度読んだ本を三度読む』（柳広司著　岩波新書 2019）ID17868**※タイトル見て面白そう、と。**

文　庫

『逃亡記(時代ミステリ傑作選)』（山本周五郎著　講談社文庫 2019）ID17869
『神々の流竄』（梅原猛著　集英社文庫）ID17870
『嘘つきは殺人のはじまり(ミステリー傑作選 43)』（日本推理作家協会編　講談社文庫）ID17769※request
『ミゲル・ストリート』（V.S. ナイポール著　小沢自然/小野正嗣訳　岩波文庫） ID17770
『一〇五歳、死ねないのも困るのよ』（篠田桃紅著　幻冬舎文庫 2019）ID17871

沙羅の樹文庫だより 154－2

大・室・高・原・便り～外伝～

〈流れ星〉

「クマのプーさん展」(6 月 30 日まで　於：渋谷文化村ミュージアム)の機会に、今まで読んでいなかったミルン親子の自伝３冊を読んだ。
父親の自伝『今からでは遅すぎる』550 頁に驚き、あとがきから読む。石井桃子氏が 90 歳を過ぎ、何年もかけて翻訳されたらしい。英語に手こずり数人の協力者を得たとか。
学生時代までは兄弟との繋がりが深く、楽しい生活が活き活きと描かれる。だが、人生の後半は厳しい。戯曲・詩・小説・編集の仕事をしたが「プーの４冊」が売れに売れ、児童文学作家と評されて本人は辛かったようだ。息子がイジメや取材で心が疲弊、親子の断絶期間も長かった。でもさりげない自慢話もあり、かなりの自信家と感じた。
息子ミルンの自伝『クマのプーさんと魔法の森』(石井桃子訳)、こちらは章が短く読みやすい。百町森のクリストファーロビンと私は全く違う人間だと繰り返し言う。プー作品の裏話が語られ、父への愛憎も見え隠れする。世界に名前を知られた息子ミルンが、辛い少年時代を何とか潜り抜け大人になるまでを語る。プー作品の舞台にもなった美しい田園の生活、ナニーがいる子ども部屋で常に一緒にすごす幼少期。父母との時間は少ないが、見聞きする子どもの世界が正直に活き活きと描かれて、読み手も心を潤される。
続く『クリストファーロビンの本屋』(小田島若子訳)、前半の戦争体験から惹きつけられた。召集されリバプールから海路イラクへ。その後ヨルダン～パレスティナ～エジプトそして砂漠地帯へ。兵士の立場や心の推移が、軍人の目と旅人の目で描かれておもしろかった。戦後、父と同じケンブリッジ大学に進んだが、作家の道は諦める。家庭を持ち田舎で本屋を開く。娘は脳性麻痺の病、父母との死別、そして人生を振り返るまで。苦悩した日々を書かずにいられなかったのだろうが、よくぞ書いてくれたと思う。人として親しみを感じるし、この２冊は味わい深いものだった。
★「流れ星」さんは、長年文庫を続け、子どもの本と人を結ぶ大きな団体の代表でもある。科学を楽しく遊ぶ色々な手管を持ち、屢々海外にも出かけ進取の人。文庫にも 2 回来ていただいた。再来を待ち望んでいる大人もいる!! 忙中での寄稿感謝。

いただきました!!

(単行本)

『湯葉　隅田川(新装版)』（芝木好子著　講談社）ID17872
『人生の親戚』（大江健三郎著　新潮社）ID17873
『日本のプー横丁―私的な、あまりにも私的な児童文学史』（上野瞭著　光村図書） ID17874

『田舎の猫とおいしい時間』（宮迫千鶴著　清流出版） ID17875
『痴呆の人の思い、家族の思い』（(社) 呆け老人を抱える家族の会編　中央法規） ID17878
『今、目の前のことに心を込めなさい』（鈴木秀子著　海竜社 2017） ID17876
『世界でたったひとりの自分を大切にする』（鈴木秀子著　文響社 2018） ID17877

（文庫本）

『錆びた滑車』（若竹七海著　文春文庫 2018）ID17879
『猛スピードで母は』（長嶋有著　文春文庫）ID17880

目下、残念ながら三冊とも、文庫にはありません。そのうちに・・・。

徒然なるままに・・・

★ここ大室に常在していないのに、私は伊豆新聞にお世話になっている(伊豆新聞をとってもいないのに)。文庫では年に何回か通常の貸出業務以外に催し物をする。伊豆新聞さんはお願いすると広報を載せてくださる。★読書のお好きなそして元気な多くの大人の会員には、あまり受けてはいないようだが、それは主におはなし会。昔話や、小説家の物語を、憶えて自分の中にその世界を取り込み、自分のものにして、聴く人に自分の肉声を通して伝える。★5 月の〈若葉のころのおはなし会〉と、7 月の〈海の日のおはなし会〉だ。大きい人のためと、小さい人のたちのためのもの、2 回ずつ。若葉は文庫をはじめた次の年から、東京の語りの友人をゲストに。★この 5 月で 13 回。今では文庫のスタッフを中心に始めた〈おはなし沙羅〉の人々もゲストに交って語る。みんな中々上達して心にしみるおはなしを聴かせてくれるようになった。★しかし、聴き手が少ない。伊豆新聞に掲載されても…。本を自分で読める人は、自らの力で物語の世界を楽しめるからか。それとも、素人のはなしは大したことがないと思われてか。本を借りる好奇心で、たまには、これらのおはなし会にも足を運んでほしい!と願う文庫の主である。★5 月 18 日、19 日、文庫のヒメシャラの木の下で、繰り広げられるおはなしの世界に心をゆだねてみませんか。今回のゲストは、全日本語りネットワークの語りのスペシャリストさん方です。〈おはなし沙羅〉も頑張りますよ。(お天気が心配ですが、私、晴れ女です。)★以上、伊豆新聞さんへの感謝と、おはなし会の宣伝に終始してしまいご容赦。

・・・・・・・・・・　・・・・・・・・・・

◇相変わらず、歩いている。数日前、夜の遠出をして、この間みた素敵な家の通りをもう 1 度と思って曲がったところが、まるで違う景色。一つ手前を曲がったらしい。この通りは平成から昭和にフィードバックしたかと思うほど、違っていた。古い、そして安普請といった感じ、それも建って数十年、あちこちに痛みが入った私たち世代のような。一筋先の通りは、バリバリの壮年の今風の家々?!何だか古い時代に迷い込んでしまったようだった。◇しかし、そこから坂を少し下って大通りを越えた私の住んでいる街は、私が高校生の頃はまだ一面田んぼだった。だから道路も碁盤の目のように走っている。40 年前に越してきた頃は田んぼや畑や植木畑果樹林がたくさんあった。今では家が林立。みんな趣向をこらしてはいるのだけれど、何か洋風の家が今でも日本になじまない、と思ってしまう。◇谷崎潤一郎『陰翳礼讃』をつまみ読みして、なぜか、納得して、懐かしい想い。◇でも、平成生まれや令和に生きる人々にとって、今の日本が唯一自分の国、街なのだろう。◇夜の帳の中、家々に灯るあかりそれぞれを見上げながら私は歩く。今日は 8000 歩!　（さ・ら）